

【実践報告】

日本語との比較を通じた英語発音指導

笠原園子

Teaching English Pronunciation Based on Contrastive Phonetics

KASAHARA, Sonoko

要旨：日本語話者に対し、母語である日本語との比較をしながら実施した英語の発音指導について報告する。日本で生まれ育った学習者の場合、日本語の音声知識なり発音の習慣が英語の発音を習得するうえで多かれ少なかれ影響する。そこで日本語との類似点や相違点を明示的に教授することによって、正確な英語を習得させることを試みた。対象者は文教大学で英語を専攻している1年生38名である。授業期間は2012年4月から7月まで合計28回にわたる。成果として、日本語と英語の音声比較が英語の発音習得の助けになる具体例を学生自身が言葉で説明できるようになったこと、また母語である日本語が習得の妨げになる例と対策方法も説明することができるようになったことなどが挙げられる。一方、このような教授法の効果を検討するには、日本語との相違点や類似点の説明をうけなかった別クラスの学生の英語発音と比較する必要性が課題として残る。
キーワード：発音指導、臨界期仮説、母語、調音、意識化

1. 背景と目的

1.1 文教大学に於ける「英語発音演習」の位置づけと目的

文教大学文学部英米語英米文学科では2012年4月より新カリキュラムを開始した。改革の主な目標の一つに、入学時の英語運用力を卒業時まで確実に伸ばすことが掲げられ、新しい演習科目が設置された。その一つが一年次の必修科目、「英語発音演習」である。1学年を名簿順に4クラスに

分け、それぞれ週 2 回の授業を行う。4 クラス共通の目標は以下のとおりである。

英語の発音のメカニズムや聞こえ方の特徴について、背景にある理論を理解すると共に、英語の音を実際に聴き取り、発音する演習を集中的に行う。特に、次のような項目を日本語との比較を通して確認し、実感したうえで、身につける。

- (1) 音の分類の基礎と特徴（母音は舌の位置や唇の形、子音は有声、無声の区別、調音点、調音方法）
- (2) 英語に特徴的な、強勢パターン、リズム、イントネーション
- (3) 自然なスピードで話された英語において生ずる諸現象（音の脱落、連結、弱化など）

3 年次に専門科目として「英語音声学・音韻論」が設置されているので理論の詳細はそちらに譲るとし、1 年次の「英語発音演習」では大学指定の教科書、Gilbert (2005) に付属する CD を聴いて繰り返し発音するなど実践に時間をかける。

1.2 学生の背景と授業のねらい

筆者が担当したクラスの学生 38 名は全員、日本語を母語とし、中学 3 年間でグアムで過ごしたという 1 名を除いては日本で生まれ育っている。そんな彼らになぜ日本語との比較を通して英語の発音を教える必要があるのか。

ひとつには学生たちの年齢が 18 歳から 19 歳に達していることが自然習得を難しくさせることが挙げられる。言語習得はある年齢を超えると難しくなるという臨界期仮説を Birdsong (1999) は次のように定義している：

...the CPH (Critical Period Hypothesis) states that there is a limited developmental period during which it is possible to acquire a language be it L1 or L2, to normal, nativelike levels. Once this window of opportunity is passed, however, the ability to learn language declines (1).

外国語習得の中でも特に音声の習得は、思春期が始まるや否や、もはやネイティブのようになることは難しいという主張もある (Selinger 1978, 11-19)。Lennenberg (1967; 167) は思春期を過ぎると意識的で骨の折れる努力が必要になると言う。

すでに母語という一つの言語が確立された後に新たな言語を身につけようとする時、母語の中で近い音をあてはめて処理し、産出においても母語の中から似ていると思う音を持ち出しかねない。対象言語の音を母語のある音と同じもしくは似ていると知覚してしまうと、新たな音声カテゴリーをつくらなくなってしまふのである (Flege 1995, 239)。実際には違う音であり、調音位置も調音様式も異なることを明示的に教えない限り、正しい英語発音を自然に身に付けることは難しい。しかし殆どの学生が中学、高校でそのような機会を持たぬまま大学に入学してくる。

筆者が担当したクラスの学生 38 名にアンケート調査で、「この授業を受ける前に英語の発音を勉強したことがあるか？」と聞いたところ、30 名が「ない」と答えた。勉強したことがあると答えた 8 名のうち 6 名は、「いつ、どこで、どんな教材を使って勉強したか？」という質問に対し、「中学、高校の英語の授業で」と回答したが、教材名などの言及はなく、うち 1 名が書いているように、「授業の一環として触れた程度で、発音に特化した授業ではなかった」ようだ。

「この授業を受ける前に英語の発音を勉強したことがある」と答えた残り 2 名のうち 1 名は「小学校 4 年から 5 年にかけて ECC (英会話学校) で」と答えている。もう 1 名は「高校生のとき、個人的に高校の先生に教わった。京都外国語大学の昔の教科書を使っていた」と答えている。この 2 名の学習

経験について更に詳しく調査する機会はなかったが、日本語と比較しながら体系的に英語の発音を勉強した経験は少なくとも8割近い学生が持たない状態で入学してきたと考えられる。

そうした背景の学生たちに行う英語発音演習では、母語の音声知識を英語発音習得の阻害要因としてではなく、むしろ利点として生かせないだろうかと筆者は考えた。たとえば「レモンのレと **lemon** の **le** の子音は同じか？」と問いかけ、実際両方発音させ、気づいたことを発表させる。ある英語の音と似ている、もしくは同じだととらえがちな日本語の音声はどう調音するのか、自分の言葉で説明させることで、学生自らがふだん当たり前に使用している母語を客観し、言語事実に注意を払うようになることを狙いとした。そして、日本語と英語の音声の類似点や相違点を明示的に教授することによって、正確な英語発音の意識化を試みた。

1.3 授業の進め方 (Appendix 1 参照)

授業では教科書の練習問題に入る前に、分節音(母音、子音)であれば調音方法やスペリングとの関係を説明した。超分節音(アクセントやイントネーションなどプロソディ)は英語も日本語同様、音節が音声上の区切りになること、ただし日本語と違って各音節の長さや強さは一定ではなく、長短、強弱が英語らしいリズムを生み出すことを説明した。さらに英語の代表的な音調と、核の配置について説明した。日本語と対照させて説明するにあたっては、英語、日本語両方の音声と音韻に対する詳細な知識が必要になる。そこで、日本人学習者が注意すべき点について、先行研究、竹林・斎藤(2008)を参照しながら教えた。

期間は2012年4月から7月まで、合計28回の授業にわたる。1コマ90分の授業を週2回行う。母音、子音、超分節音(プロソディ)の順に進めたが、強母音と弱母音の音質的な違いが語アクセントや文のリズムにどう関係するかは、母音の演習時に教えた。この3つに大きく分けた項目がそれぞれ終わるごとに筆記テストと実技テストを行い、最終日に筆記形式の

期末テストを行う。実技テストは38名を2グループに分け、2回の授業にわたって実施した。一人ずつ、決められた時間に教室に入室し、前の週に渡しておいた課題を読み上げる。発音記号をあらかじめ調べて記入しておいても良いとした。まずは課題をすべて読ませ、そのあと不正確だった箇所を指摘し、ある程度出来るようになるまでその場で練習させた。

母音の説明、及び練習に4コマ(6時間)を割り、そのあと1回の授業で筆記テストと、翌週の実技テストの予行練習を行った。子音の説明、及び練習には6コマ(9時間)を割り、そのあと1回の授業で筆記テストと、翌週の実技テストの予行練習を行った。超分節音も子音と同様に、説明と練習に6コマ(9時間)を割り、そのあと1回の授業で筆記テストと、翌週の実技テストの予行練習を行った。さらに、期末テスト直前の日にはクラス独自のアンケートを実施し、授業を通じて感じたことを書かせた。

練習に使った教科書のCD音声は標準的なアメリカ発音であるためアメリカ発音を中心に説明したが、標準的なイギリス発音との違いにも適宜触れ、映画「マイ・フェア・レディ」の鑑賞を通してコックニーについても説明した。

2 授業内容

2.1 母音

母音の授業の導入として‘hat’, ‘hot’, ‘hut’の3語を板書し、3つの発音がどう違うか尋ねた。学生は各自、この3語を発音してみたうえで「hatはハット、hotはホット、hutはよく分からない」、「hatとhutは同じ」、「みんな違うけど、どう違うのか説明できない」などと答えた。次に、この3つの母音のうち日本語の「ア」と同じだと思うものはあるか尋ねたところ、「どれも違う」という正解をあげた学生はいなかった。そこで単語の下にそれぞれの発音記号を書き、各母音の調音を説明した。

こうした導入の理由はリーディングの授業で音読させると、/æ/, /ɑ/, /ʌ/をすべて日本語の「ア」で代用する学生が多かったからである。発音記号

を確認する習慣をもつよう促すとともに、日本語の音で代用せず正しい英語の調音を身につけさせるために、竹林（1991: 21）の母音図（図1）を配布し説明した。この図は縦軸が舌の位置の高低を表す。横軸は左ほど舌が前寄りになることを示し、右へいくほど後ろ寄りになることを示している。授業では日本語と英語の調音位置の相対的な関係を明らかにする目的で活用した。

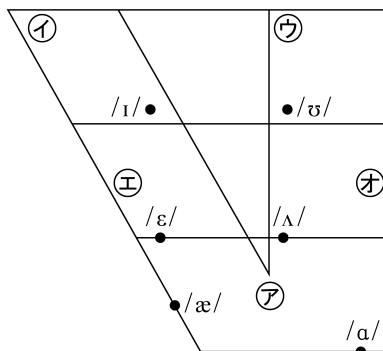


図1 (竹林 1991:21)

同様の目的で、日本語の「イ」と英語の/i/、「ウ」と/u/、「エ」と/e/がびったり重ならないことを図で認識させた。さらに、弱母音の/ə/も日本語のいかなる母音とも違うことを示した。

日本語の「イ」の母音/i/より英語の/i/の方が舌の位置が低く後ろ寄りで、正確には[e̞]で表すべきものである（竹林・斎藤 2008: 21）。

「ウ」と/u/は舌の高さの違いに加え、後者はやや円唇であるのに対し、日本語（特に東京を中心とした共通語）の「ウ」は唇の丸めを伴わず、上下の唇が接近する[u]なので、両者の間には音色の多少の違いがある（竹林・斎藤 2008: 29）。

英語の母音を日本語の母音で代用することで必ずしも差し障りが出てくるとは言えない。たとえばイギリス発音の[e̞]は[e~e̞]で日本語の「エ」つ

まり[e]に近い(竹林・斎藤 2008: 23)。しかし、学生にはより英語らしい発音を習得してもらうために、英語と日本語の音声的な違いはできるだけ細かいレベルも含め教授することにした。

長母音についても日本語の母音をあてはめ、それを伸ばして発音するのは違うこと、つまり母音の音質が日本語とは異なることを実感させた。/i:/は日本語の「イー」に近いが、特に語末で強い強勢を受けたとき[i:]と二重母音のようになること(竹林・斎藤 2008: 30-31)を説明し、‘see’, ‘agree’などを発音練習させた。

二重母音では第二要素、たとえば/aɪ/であれば[i]をはっきりとした日本語の「イ」として発音しないよう(竹林・斎藤 2008: 41)、「愛」¹⁾と、‘eye’の比較を例に挙げて説明、練習した。‘eye’は第一要素に比べ第二要素の方が調音にかけられるエネルギーが弱い。言い換えれば第一要素の方が長く長い音になる。したがって、両方の要素に同程度のエネルギーを使うと英語らしく聞こえなくなる。

以上、母音では英語と日本語の音質的な違いに焦点をおいた。

2.2 子音

どの言語でも子音を発音するときは調音器官を使って呼気の排出を邪魔するのであるが、どこで邪魔をするかという調音位置に注意が必要である。ある英語の子音について日本人の耳で聴いて似て聞こえる音が日本語にあると、その調音位置で閉鎖なり狭めをつくってしまう。

たとえば学生たちに/f/を含む単語を発音させると、‘food’, ‘fan’, ‘fitness’などカタカナの訳語が定着している単語の/f/を日本語の「フ」の子音で代用してしまう。「フ」の子音[ɸ]は上下の唇を互いに近づけて調音する。つまり調音位置は両唇である。一方、/f/の調音は、上の前歯に下唇の内側を軽くあて、両者の隙間から呼気を押し出すという運動であり、「フ」とは異なる(竹林・斎藤 2008: 93)。日本語を発音する時にはまったく行わない運動であるため、繰り返し練習し習慣化することを促した。

/θ/と/ð/も日本語ではまったく行わない調音器官の運動を要するが、これら th の音は高校までの英語の授業で「上下の歯で舌を挟んで発音する」と習ったため、そのように気を付けているという人が多かった。じっさいには英語話者は舌先を軽く上の前歯の裏にあてているのだが（竹林・斎藤 2008: 94）、軽くであれば舌先を挟むのも初期段階としてはよしとした。というのも、/θ/を/s/で代用する人もいるので、/s/よりも舌を前へ出せという意味ではそれなりの効果がある（竹林・斎藤 2008: 95）。

単語をひとつひとつ発音する時は正しく調音できても、文中に出てくると/ð/をザ行の子音で代用している学生がいた。英語の/z/と/ʒ/もザ行子音で代用しないよう注意する必要がある。前者を「ザ、ズ、ゼ、ゾ」の子音[**dz**]、後者を「ジ」の子音[**z**]で代用してはいけない。/z/は/s/の、/ʒ/は/j/の有声音であるという説明の仕方をすると、学生たちは上手く調音できた。

英語の/n/は舌先を上歯茎につけて調音することを‘nice’や‘announce’など/n/が語頭や語中にくる単語で確認したあと、「では日本語の三（さん）と英語の sun はどう違うか？」と学生に聞くと、「ん」と/n/の調音上の違いに気づいた人はほとんどいなかった。英語の/n/は単語のどこに来ようと調音は変わらない。「ん」は[N]、つまり口蓋垂音である。緩い閉鎖が後舌面後部と口蓋垂の間でできる（竹林・斎藤 2008: 109）。この調音上の違いを認識させ、英語の語末の/n/を「ん」で代用しないよう注意した。

以上は間違えてもコミュニケーション上、致命的な問題は生じにくいですが、以下は間違えると意味の伝達上、支障をきたしかねないので特に注意が必要である。

後ろに/i/もしくは/i/がくると/s/と/j/を混同してしまう学生が 3 分の 1 近くいた。‘sea’と‘she’がどちらも[si:]になってしまうか、どちらも[ji:]になってしまう。さらには/ji/の子音を日本語の「シ」の子音[**ɕ**]で代用してしまう。この音は英語の/j/にきわめて近いが、調音位置がもっと奥になり、英語の/j/と違って唇の突出しは伴わない（竹林・斎藤 2008: 101）。学生はこうした相違点を知らないで、‘season’を[**ci:zn**]、‘seat’を[**ci:t**]と

発音してしまうのである。カタカナ英語の影響とも考えられるが、カタカナ英語になっていない‘sea’も[ei:]と発音してしまうケースがみられたので、一概に言えない。

日本人は英語の/l/も/r/もラ行の子音で代用してしまい区別をしないとよく指摘されるが、学生に聞いたところ/l/とラ行子音は同じだと思っている人が多かった。/r/はラ行子音でないことを学生はみんな知っていたが、どうも調音の仕方がわからないという人がほとんどであった。日本語のラ行子音は語頭では有声のそり舌閉鎖音[d]を使う人が多く、これは[d]に比べて閉鎖の接触が軽く、また開放も弱い。この他そり舌側面音[j]や、たたき音[r]を用いる人もある。語中では[r]がもっとも普通である（竹林・斎藤 2008: 116-117）。いずれにせよ英語の/l/とも/r/とも異なる。とくにラ行子音では舌尖が硬口蓋前部に触れるが、英語の/r/は決して触れないことを留意させて練習した。

2.3 超分節音

“超分節”にはアクセント、リズム、イントネーション、ポーズなど、いろいろな要素が含まれるが、ここでは特に日本語と比較して教えたものを取り上げる。

‘strike’と板書して発音させると、何人かの学生が「ストライク」[su/to/ra/kuu]と発音した。日本語では基本的に子音が続くことがないので英語の子音結合は難しい。どうしても間に母音を入れてしまう。また、日本語では子音で終わることも撥音を除いてはないので、英語の語末に「ウ」など母音を入れてしまう。

たとえば‘strike’の/st/では/s/のときに上下の歯の隙間はごく狭いことを確認させ、そこから息のみ出したらすばやく舌尖を/r/の位置、すなわち上歯茎につけるとよいのだが、次の/r/を予測して歯茎後部の方につける。このとき舌は/r/のかまへの凹状にしておく（竹林・斎藤 2008: 130-131）。「次の子音を予測した調音位置」という点が重要である。こうした練習は、ま

ず英語の各子音の調音に慣れていないと、なかなか上手くいかなかった。とくに/r/を含む/tr//dr//kr/などの結合では、まだ/r/自体の調音で苦勞している学生にとっては難しいようだった。また、子音で終わる語のあとに母音で始まる語が続くときにはつなげて発音するよう指導すると、これは難なく実現できていた。

日本語のリズムの基本も音節であり、1音節に対し2音節は二倍の長さ、3音節は三倍の長さになる。これに対し英語では‘movement’が‘move’の二倍の長さにはならない。‘movement’の/u:/の方が、‘move’の/u:/よりかなり短く、-mentはアクセントのない弱音節として圧縮して発音される（竹林・斎藤 2008: 175）。学生はすべての音節を同じ長さで発音してしまう傾向があった。そこで強音節で手拍子をとって英文を読ませると、最初は手拍子に発音が追いつかなかったが、何度も練習するうちに体得していった。

英語のイントネーションについて何か知っているか学生に尋ねると、「疑問文は最後が上がって、肯定文は下がる」という答えしか返ってこなかった。そこで、「最後で上がる」とはもう少し具体的にどこから、どう上がるのかを説明するために例に挙げたのが、「ピザ？」と聞き返す場合のイントネーションである。日本語ではあくまで「ピザ」という単語のアクセントは保たれたまま、最後に少し上がるだけであるが、英語の‘Pizza?’ではアクセントがおかれる/pi:/が上昇の始点であり低めに発音され、残りの音節/tsə/を使って上がっていく（窪菌 1998, pp.146-147）。これを説明する前に学生に‘Pizza?’を発音してもらうと、日本語と同じように第1音節の方が高く、第2音節で一回下がったあと最後に少し上がるという音調で発音した人が複数いた。

3 まとめと課題

前述のとおり、母音、子音、超分節音の小テストを随時おこなった（Appendix 2～7 参照）。それぞれにまず筆記テストをおこなってから実技テストをおこなったが、筆記の結果、つまり知識と、実技での実現が必ず

しも一致しない点に興味深い。たとえば筆記テストで「三（さん）」の「ん」と ‘sun’ の/n/の調音上の違いを記述させたが、正解者は5名しかいなかった。しかし実技テストでは ‘Ken’ ‘son’ など語末の/n/を「ん」で代用する者は一人もいなかった。一方、知識は定着したのに実現が出来ないケースもある。たとえば、単音の/ʊ/, /æ/, /ɑ/, /ʌ/, /ə/については筆記で正解していても実現できない学生がそれぞれ2～3名ずついた。日本語の「ア」のように発音してしまうのである。

筆記テストは出来なくても実現は出来るという場合、筆記が記述式であることが多かった。音声器官名をおぼえていなかったり自分の言葉で説明できなかったのである。逆に筆記テストの選択式は“たまたま”答えが当たただけで実は十分に理解していないこともある。その結果実現できないということも考えられるし、単に発音練習が足りないため上手いかなかったとも考えられる。

以上は分節音についての傾向であるが、超分節音ではイントネーション核の配置について、知識は定着していなくとも、実技で実現は出来た学生の方が目立った。これは筆記テストのあとに練習を1時間みっちりおこなった効果かもしれないし、分節音で舌、唇、顎などの器官を動かすより、声の高さをコントロールする方が短期に改善しやすいのかもしれない。今後調査してみるのも興味深い。

期末試験（Appendix 8 参照）はこれまでの筆記小テストと同じ問題、もしくはその応用問題を出題した。50点満点で最高点は50点、最低点は31点、平均点は44点であった。最終的には日本語と英語の発音の違いを知識としておおむね定着させることができたと思われる。

最後の授業でアンケートをとった（Appendix 9 参照）。

「この授業では日本語の発音と比較しながら英語の発音を説明しましたが、そうした比較は理解の助けになりましたか？」という問いに対し、「助けになった」と答えた人が35名、「かえって混乱した」人はゼロ、「どちらでもない」と答えた人が3名いた。

さらに、「外国語の発音を身につける際、母語の知識や調音の習慣がプラス活用できる場合と、邪魔する場合がありますが、どちらの場合でもよいので自分が知る具体的な例をあげてください」という項目を設けた。無効回答数6名をのぞいた全員が、日本語と英語の発音でどんな類似点、相違点に気を付けなければいけないのか回答できていた（Appendix 10 参照）。分節音より超分節音に対して、気を付けなければいけないという意識がうかがえる。実技テストでは分節音より超分節音の方が良くできていた。

以上のことから、日本語と比較して英語を教授することで両言語の違いを認識させ、意識化を促すことができたと言えるであろう。ただ、このような授業が学生の発音習得により良い影響を及ぼすかどうか効果の検証をするには、日本語との相違点や類似点の説明を受けなかった別クラスの学生の発音と比較する必要がある。それを次の段階として計画したい。

また、正しい、あるいは英語らしい発音ができない理由が必ずしも母語のせいではない場合もある。たとえば日本語と英語では統語構造がまったく違うが、日本人学習者による英語のイントネーションの誤りには日本語が影響しているのだろうか？日本語との比較が教授するうえで役立つのはどんな時か、さらに考察していく必要があると思われる。

さらに、今回は授業中および実技テストで学生の発音を一人の教員が正したり評価したりしたが、PRAATなどの機械を使ってフォルマントや波形をみせるなど客観性を取り入れることの効果もみたい。そうした試みはすでに佐藤(1999)などでなされているので、まずは先行研究からならいたい。

<注>

- 1) 「日本語の「愛」は急いで流れるような調音をすると二重母音となりがちだが、ゆっくり丁寧に調音すると母音隣接になる」(城生(2008))。

<参考文献>

- 窪園 晴夫 『音声学・音韻論』(1998) くろしお出版
- 佐藤 努 「日本語話者による英語発音からみた日本語・英語音声の相違」(1999)
『音声研究 第3巻第2号』40-50
- 城生 佰太郎 『一般音声学講義』(2008) 勉誠出版
- 竹林 滋、渡邊 末耶子、清水 あつ子、斎藤 弘子 『初級英語音声学』(1991)
大修館書店
- 竹林 滋、斎藤 弘子『新装版 英語音声学入門』(2008) 大修館書店
- Birdsong, D. (1999) Introduction: whys and why nots of the Critical Period Hypothesis for second language acquisition. In D. Birdsong (Ed.), *Second Language Acquisition and the Critical Period Hypothesis* (pp. 1-22). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Flege, J.E. (1995) Second language speech learning: theory, findings, and problems. In W. Strange (Ed.), *Speech Perception and Linguistic Experience: Issues in Cross-Linguistic Research* (pp. 233-277). Timonium, MD: York Press.
- Gilbert, J. B. (2005) *Clear Speech*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lennenberg, E. (1967) *Biological Foundations of Language*. New York: John Wiley.
- Selinger, H. (1978) Implications of a multiple critical periods hypothesis for second language learning. In W. Ritchie (Ed.), *Second Language Acquisition research* (pp. 11-19). New York: Academic Press.

Appendix 1 英語発音演習 Bクラス シラバス

科目名	英語発音演習	1学年
サブタイトル		2単位
教員名		
授業概要	<p>理論を柱としつつ、実践的な聞き取りと発音の練習をおこなう。日本語と比較しながら、正しい英語の発音を確認する。</p> <p>1) 母音は舌の位置や唇の形 2) 子音は有声、無声の区別、調音点、調音方法 3) 英語の強勢、イントネーション、リズムの特徴 4) 自然なスピードで話すときに生じる諸現象(音の脱落など) 以上のことを学び、実現できるよう練習する。</p>	
授業計画	<p>第1回～第4回 Unit 1 Syllables Unit2～5 Vowels and Word Stress</p> <p>第5回 母音の筆記テスト</p> <p>第6回～第7回 母音の実技テスト</p> <p>第8回～第13回 Unit10～14 Consonants</p> <p>第14回 子音の筆記テスト</p> <p>第15回～第16回 子音の実技テスト</p> <p>第17回～第22回 Unit6～9 Sentence Focus Unit15 Thought Groups</p> <p>第23回 超分節音の筆記テスト</p> <p>第24回～第25回 超分節音の実技テスト</p> <p>第26回～第27回 総復習、エラーニング、映画等</p> <p>第28回 期末テスト</p>	
評価方法	<p>受講態度、小テスト、期末試験、発音試験などの総合点。ネットアカデミーへの取り組みも含む。詳細は初回授業で説明。</p>	
評価基準	<p>90%以上 AA 80%以上 A 70%以上 B 60%以上 C 59%以下 D (不合格)</p>	
テキスト	<p>"Clear Speech" 3rd edition by Judy Gilbert</p> <p>ISBN: 978-0-521-54354-5</p>	
参考書	<p>授業中に随時紹介</p>	

Appendix 2 母音 筆記テスト

氏名： _____ /10点

1. 英語の /ɒ/ について、括弧内の正しい方を○で囲みなさい。(1点×2)
英語の /ɒ/ を発音する時は、日本語の「う」を発音する時よりも舌の位置が(低く・高く)なければならない。唇を(すぼめる・つきだす)と英語らしい音になる。
2. 単語の下線部の発音記号を、以下の候補から選んで書きなさい。
さらに、その中で日本語の「ア」と同じ音になるものがあれば、○で囲みなさい。
(1点×5)

候補： /ɑ/, /æ/, /ʌ/, /ə/

sat / _____ /, around / _____ /, got / _____ /, ut / _____ /

3. 日本語の「愛」と英語の eye の発音上の違いを説明しなさい。(1点)
4. 日本語の「バナナ」と英語の banana の発音上の違いを、音の長さとお口の形の2点から述べなさい。(1点×2)

Appendix 3 母音 実技テスト

My name is _____ .

1. hat, hot, hut

2. but, bat

3. mop, map

4. bit, beat

5. bit, bid

6. boat, bought

7. so, saw

8. Sam will love it very much.

9. Thanks a lot!

10. Who took my cookbook?

11. Throw away those clothes you bought a long time ago.

12. I tried to hide his toy.

13. Canada, banana, Japan

Appendix 4 子音筆記テスト

氏名：

/10点

1. 英語の/h/と//の違いについて、以下3点から説明せよ。(1点×3)

舌先：

/h/

//

舌の両端：

/h/

//

舌根：

/h/

//

2. 正しい方を○でかこみなさい。(1点×4)

日本語のラ行の子音を発音する時、舌先は(上歯茎・上歯茎より少し後ろ)に付くが、英語の//では(上歯茎・上歯茎より少し後ろ)に付く。また、付き方が(英語・日本語)の方が軽く、はじくようであるのに対し、(英語・日本語)はしっかり付く。

3. オーストラリアにある都市、シドニーを英語で発音する場合、発音記号はどうなるか？正しい方を○で囲みなさい。(1点)

/sidni/

/ʃidni/

4. 日本語で「三(さん)」と言う場合の/n/と、英語の sun の/n/は、発音上どんな違いがあるか？(2点)

Appendix 5 子音 実技テスト

My name is _____ .

1. cap, feet, look
2. cab, said, bag
3. food, who'd
4. vote, boat
5. thank, tank, sank
6. see, she
7. breathe, breeze
8. read, lead
9. She seems to be able to see many things.
10. Ken, you are my good son!
11. The singer has longer hair and wears a nice ring.
12. Mary is really smart.
13. Lisa is cool!
14. What a wonderful wedding it was!

Appendix 6 超分節音 筆記テスト

氏名：

/10点

1. 以下は音の連続についての説明である。() 内において正しい方を○でかこみなさい。(0.5点×4)

(母音・子音)を中心として、前後に境目があると感じられる音声上の単位を「音節」(syllable)という。たとえば education という語は(4つ・5つ)の音節から成り立つ。そして、特定の音節が他の音節よりも(強く・目立って)聞こえるとき、その音節に「アクセント」があるという。education は(第1音節・第3音節)に第1アクセントがくる。

2. 以下はそれぞれ下降調で発音したとき、急激に下がってそのあと二度と上がらない方に下線が引いてある。どちらの意味になるか、○で囲みなさい。(1点×3)

- 1) white house (大統領官邸・白い家)
- 2) green house (緑色の家・温室)
- 3) dancing girl (踊り子・踊っている女の子)

3. 以下は文アクセントとイントネーションについての説明である。() 内において正しい方を○でかこみなさい。(1点×4)

文中においてふつう弱形で発音されるのは(内容語・機能語)である。それは(冠詞や前置詞など文法機能上必要な語・名詞や動詞など意味伝達上必要な語)である。

文や節など、話者が情報の区切りだと思うところでポーズがおかれたり音調が変わったりする。その一つ一つを“音調群”という。一つの音調群には必ず一つの“核”がある。核とはふつう、その音調群の(最初・最後)の(内容語・機能語)の第1アクセントをうける音節であり、情報の焦点を示す。平叙文であれば音調は核において急激に下がり、疑問文ではそこから上昇していく。

4. 下線が引かれているセンテンスをひとつの音調群とした場合、核がくる音節(単語ではない)を○で囲みなさい。(1点)

A: Where are you going to spend this summer?

B: I haven't decided.

Appendix 7 超分節音 実技テスト

My name is _____ .

1. He went to the station to meet his uncle.
2. Jane can give you wine.
3. President Obama lives in the White House.
4. We may be able to buy a white house.
5. No (下降調)、 No (上昇調)、 No (下降上昇調)
6. Nobody (下降調)、 Nobody (上昇調)、 Nobody (下降上昇調)
7. My cat eats fish.

He loves it.

But only fresh fish.

He eats slowly.

I don't know why he eats that way.

8. A: I lost my hat.

B: What kind of hat?

A: It was a rain hat.

9. A: Does she like classical music?

B: No, but he does.

Appendix 8 期末テスト

氏名： /50 点

1. 4 つの単語の下線部の発音記号を、以下の候補から選んで書きなさい。

さらに、その中で日本語の「ア」と同じ音になるものがあれば、○で囲みなさい。

(2 点×5)

候補： /a/, /æ/, /ʌ/, /ɑ/

sat / /, around / /, got / /, but / /

2. 日本語の「愛」と英語の eye の発音上の違いを説明しなさい。(10 点)

3. 正しい方を○でかこみなさい。(2 点×4)

日本語のラ行の子音を発音する時、舌先は(上歯茎・上歯茎より少し後ろ)に付くが、英語の /l/ では(上歯茎・上歯茎より少し後ろ)に付く。また、付き方が(英語・日本語)の方が軽く、はじくようであるのに対し、(英語・日本語)はしっかり付く。

4. 「システム」という言葉の英語訳を発音する場合、発音記号はどうか?

正しい方を○で囲みなさい。(4 点)

/sɪstəm/

/fɪstəm/

5. 以下は音の連続についての説明である。() 内において正しい方を○でかこみなさい。(2 点×4)

(母音・子音)を中心として、前後に境目があると感じられる音声上の単位を「音節」(syllable)という。たとえば emotion という語は(3 つ・4 つ)の音節から成り立つ。そして、特定の音節が他の音節よりも(強く・目立って)聞こえるとき、その音節に「アクセント」があるという。emotion は(第1音節・第2音節)に第1アクセントがくる。

6. 下線部が引かれているセンテンスをひとつの音調群とした場合、核が来る音節を○で囲みなさい。(5 点)

A: What are you going to do after graduation?

B: I haven't thought about it.

7. 母国語が習得されたあとに外国語の発音を身につける場合、様々な形で母国語の発音が影響を及ぼします。母国語の知識や調音の習慣をプラス活用できる場合がある一方で、新しい言語の習得をむしろ邪魔する場面もあります。どちらの場合でも良いので、自分が知る具体的な例をあげなさい。(5 点)

Appendix 9 アンケート

アンケートにご協力ください。

1. この授業を受ける前に英語の発音を勉強したことがありますか？
ある・ない
“ある”場合、いつ、どこで、あるいはどの教材で学びましたか？
2. 海外に1年以上滞在したことはありますか？
ある・ない
“ある”場合、どの国に、何歳から何歳までいましたか？
3. この授業では日本語の発音と比較しながら英語の発音を説明しましたが、そうした比較は理解の助けになりましたか？該当する答えに○をしてください。

1)はい、助けになった 2)いいえ、かえって混乱した 3)どちらでもない
4. 英語の発音を身につけようとする時、日本語の発音の習慣が邪魔をすることがあれば、どんな時ですか？
5. 英語の発音を身につけようとする時、日本語の発音の習慣が助けになることがあれば、どんな時ですか？

ご協力ありがとうございました。

Appendix 10 アンケート No. 4, 5 の回答

母音

- 英語の母音の方が種類が多いのに、日本語の5つの母音で代用してしまう。(回答数1)
- 日本語の母音を基準にして、英語の母音の調音位置はどう違うのかが分かると覚えやすい。(1)

子音

- 調音器官の運動が日本語では馴染みのないタイプの子音 (θ, ð, f, v, l, r) は難しい。(6)
- 英語の /l/, /r/ と日本語のラ行子音の違いをしっかりと頭で整理して、それを実践すれば正しい発音が身に付く。母語と比較して考えると、とても分かりやすい。(1)
- 中国語には半濁音にあたる音がないため、中国語を母語とする日本語学習者は「ば、び、ぶ、べ、ぼ」をどうしても発音できない。また、聞き取りでも「ば、び、ぶ、べ、ぼ」に置き換えて聴き取ってしまう。(1)

超分節

- カタカナ英語が定着しているため、正しい英語の音質やアクセントを実現できない。(12)
- 日本語では音節の長さが一定であり、それを英語のリズムに持ち込んでしまう。(1)
- 日本語では子音が続いたり、子音で単語が終わることがないので、英語を発音する時につい母音を挿入してしまう。(7)
- 日本語は抑揚があまりないので、英語のイントネーションも単調になってしまいがちである。(3)